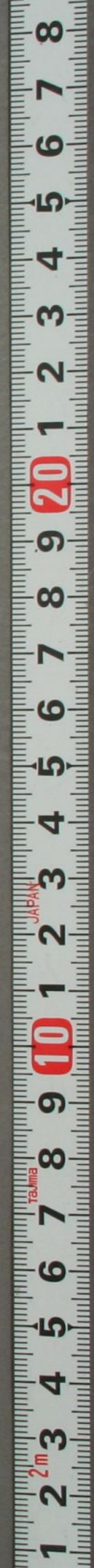




鳥居清長
甲

中村俊定文庫
文庫 18
234
1



崖下卷稿

㊦ 味譜綾錦殘編

鳥山齋

㊧ 親鸞序文詠解

文初堂註

鳥山齋 甲

綾錦後編

沾涼述



- 一 志をり歌百首 誹諧去燻
- 一 本式誹諧の辨略
- 一 十句の法并万句矢數廻湯の事
- 一 四季の正花雜乃正花并識の月日及び月
- 一 新宗匠并宗匠変名
- 一 印金比説并点印譜
- 一 古今付合変化の説 附中興比点式
- 一 古来付合高点比句

- 一 當時付合秀句
- 一 四季乃茶句并和歌
- 一 前集異説此辨略



鳥屋子びこ上卷

綾錦後編

崔下菴稿



凡謙潜去嫌此書、建治の連詞舊式應安の新式
 と根々として御筆をぬき草ふり井と如くあるの
 未書ありしは、道ありしは、遠く事あり
 茲に示大同秀吉云、紹巴翁乃敵也、
 連歌式月の歌二百余首あり、その奥云、
 右依湯和望式同く和歌二百廿六首令
 今案進上令山當代之凡可不過之、有増也

紹巴在判

右の如秋の連哥の法式は御端の如く是の如く
 七台去の五台去の五台去の五台去の五台去の
 三首を一首に併せぬやして百首に統る是
 いづれと自眼を加ふるにわたり厳重に古書
 古法を守るべし書を精研と号大練舎に
 尺を以て初學子の書を成さんと與せぬ門人初
 分の歌ひとなり書を成さんと與せぬ門人初
 一と達人の如くはあらん

紹巴翁の去燼二百餘その歌を授けし今
 さいふにわく月如く書を御筆心の井馬
 抄にありの書より拾ひて三十一字に並ぬ如
 乎に如く一人は如くありし乎とありし
 とありし其の如くをり乎とありし

謙語信打歌百首

紹巴翁の翁を
 名に合らるあり

花座	初おとしの四句なり未花のせは 独吟なまことしりこはもす
月花	正花四つまことの月ハなまこと 名花の如くははるこはせは
意秋	平林の急の秋は白竹きたるも 急の秋めをたもくきなり
のりき	うねりぬ乃ワキのしらぬの字や お柳一なこいらひひよはせは

〇甲

〇三

祝言	移宅	饗別	追善	付台燼	同	同	付台燼
夜云いそむる。海や。後家。やとめ 男はくもの。勢ひをせせら る。海に大舟。むきと井。ふん地 る。少く月や。入口をもせせら 勝別子。あま。破る。舟。く。三 善慈い。善や。別をせせら 追善い。く。き。あ。き。底。あ 志を子。下。ま。く。世。世。次 曇り。子。雲。あ。く。子。れ。く。ま。 あ。き。子。く。む。き。付。け。ぬ。き。 赤き。子。紅。朱。を。み。や。大。偉。く。 去。陣。子。く。つ。ぬ。ぬ。る。り。 花。い。の。野。月。に。雲。神。を。み。ら。い 龍。田。の。勢。ひ。つ。ぬ。ぬ。る。り。 う。勢。ひ。花。文。神。の。内。勢。回。り。 と。み。ら。の。勢。ひ。付。て。は。い。り。							

同	同字別吟	同	兆生類	兆水辺	兆夜分	兆人倫	兆居取
海。い。な。ぬ。花。子。櫛。の。付。て。り。 い。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。 汗。子。奉。り。具。足。子。是。も。五。月。雨。に 月。や。く。る。日。に。春。時。き。く。く。 家。却。り。船。や。明。不。い。ぬ。る。を。と く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。 生。勢。子。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。 新。結。風。冷。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。 祝。水。射。の。あ。ま。な。く。く。く。く。 く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。 三。月。の。勢。ひ。さ。明。の。入。り。さ。さ。さ。さ。 さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。 大。君。や。月。花。を。友。離。ぬ。く。く。 く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。 百。歳。や。厨。ろ。や。寺。の。事。な。く。く。 居。取。子。い。あ。く。ぬ。和。く。く。く。く。							

甲

乙

数字	一文字	月	三光	五性	五色	兆	兆	兆	兆
二より十の数字 百千万の四つあり	一の字はよそ おの字はよそ	一月は十二の月あり 三月は三月あり	星は三光あり 月は三光あり	金は五性あり 土は五性あり	青は五色あり 黄は五色あり	糸は兆あり 市女は兆あり	糸は兆あり 市女は兆あり	糸は兆あり 市女は兆あり	糸は兆あり 市女は兆あり

支辨	同	同	同	時分	大小	代世	前後唐様 深淺厚薄
糸。眉は二ツ。面は二ツ。面も四ツ おもておもとめん。かん七ツ去	爪。髪は二ツ。髪は二ツ。毛は四ツ 人の目は二ツ。外の目は二ツ	頬。肘。膝は二ツ。口は二ツ 胸は二ツ。腕は二ツ。手は二ツ	指は二ツ。腕は二ツ。手は二ツ 足は二ツ。腕は二ツ。手は二ツ	曉は二ツ。昼は二ツ。時ハ八ツ 夜は三ツ。朝。夕ハ四ツ	大は二ツ。小は二ツ。長七ツ去 みは二ツ。短は二ツ。長七ツ去	代は三ツ。世は二ツあり 佛の世あり代と世字をよ	深。後。廣。狭。厚。薄。浅。深。ハツ 深。ハ字去。厚。ハ四ツなり

一座一石
近物大略

同器

同人

同人

同食

香物

同水

同水

京。之。中。田舎。店。町。敷。漆

城。忌。石。ひきり

金。銀。錢。鏡。長刀。靴。弓。矢

父。母。親。の。名。ひきり

男。女。出家。侍。僧。尼。

毒。仲人。乳母。ひきり

食。汁。湯。茶。酒。毎。日。の。肴

藥。令。と。老。ひきり

峰。岨。谷。の。岡。岡。坂。の。砂

海。洲。濱。沖。灘。汀。嶋。渚。

磯。津。渡。江。池。沼。橋。堤。

井。沢。崎。原。滝。ひきり

蝉。於。虫。螢。二。白。あり。二。白。あり。二。白。あり

柳。さ。さ。木。友。芽。は。し。こ。も。こ

菊。さ。す。き。ひ。ら。葉。さ。り

夕。立。一。つ。雨。さ。め。あ。ま。二。つ。は

あ。め。と。さ。め。と。い。七。白。去。い

寺。や。堂。院。ま。や。ら。様。子。磨

宇。居。の。ま。も。あ。ら。ま。あ。ら。ま

長。風。や。秋。風。松。風。二。つ。は

の。字。入。て。又。お。り。あ。り

忘。し。ま。な。忘。君。文。も。人。の。子。を

香。や。白。心。娘。の。袂。子。圍。乃。麻。

布。帯。ひ。し。の。櫛。や。ら。あ。り

同 魚虫 同 植 同 雨 同 社寺 同 風 同 同 同

蝉。於。虫。螢。二。白。あり。二。白。あり。二。白。あり
柳。さ。さ。木。友。芽。は。し。こ。も。こ
菊。さ。す。き。ひ。ら。葉。さ。り
夕。立。一。つ。雨。さ。め。あ。ま。二。つ。は
あ。め。と。さ。め。と。い。七。白。去。い
寺。や。堂。院。ま。や。ら。様。子。磨
宇。居。の。ま。も。あ。ら。ま。あ。ら。ま
長。風。や。秋。風。松。風。二。つ。は
の。字。入。て。又。お。り。あ。り
忘。し。ま。な。忘。君。文。も。人。の。子。を
香。や。白。心。娘。の。袂。子。圍。乃。麻。
布。帯。ひ。し。の。櫛。や。ら。あ。り
中。櫛。子。居。や。り。糸。の。あ。り

甲

六

同 器 同人 同人 同食 香物 同水 同水

七句去	同	同	三句去	五句去	同	同	同
神にかろ。園まうまを。多の鳴。 別もさきぬく。七句去し	自梳子多や。思ふも破やまう。 七句去し	似せよの。勢ひの雨や。香も大も。 毎。香。大。七句去し	衣。香。竹。田の。船。活。着。成。 月。松。枕。燦。五句去	風。雲。野。山。浦。川。浪の。石。 草。本。の。原。の。香。三句去	山。影。和。あ。色。我。身。人。を 中。行。袖。の。影。三句去	旅。衣。勢。神。祇。秋。散。急。を。常 迷。懐。夜。分。居。下。三句去	巽く。多く。魚く。びーと出 おやー勢ひり三句去

二句去	同	同	同	同	同	同	同
本竹。草。魚。虫。け。と。の。多。あ。い。も 雨。を。か。ゆ。れ。ん。二句去し	人。倫。や。天。象。少。り。物。そ。び。き。の 名。の。心。の。心。二句去し	月。子。尺。や。尺。よ。う。も。手。に。被 る。よ。う。も。二句去し	お。よ。あ。ろ。も。情。を。こ。ろ。さ お。よ。あ。ろ。も。二句去し	人。と。身。や。耳。に。さ。も。音。子。勢。 う。そ。よ。あ。ろ。も。二句去し	か。編。糸。の。情。麻。雀。の。勢。ひ。ほ。も か。編。糸。の。情。二句去し	未。二。楯。ち。き。い。よ。み。と。ん。あ。こ。ろ。の 朝。よ。も。勢。も。二句去し	

甲

同	同	同	同	同	同	同	同
さくさくよ。石。梅。花。あ。ら。ま。い。沈。下。紙。 を。ま。ら。め。な。し。二。句。重。り。下。	あ。ま。の。よ。の。う。け。胡。子。夕。暮。ら。し。け。 き。ぬ。る。よ。夜。敷。二。句。き。き。り。し。	木。子。た。き。き。音。子。う。ら。や。音。子。固。 を。あ。よ。お。月。る。二。句。き。き。り。し。	波。の。う。ま。い。き。き。り。き。き。り。き。き。り。 よ。あ。こ。ら。し。き。き。り。二。句。き。き。り。し。	食。彭。や。て。と。あ。に。と。あ。も。也。成。も 半。伴。大。神。二。句。重。り。下。	秋。の。あ。の。松。の。声。ほ。も。風。二。句。 う。の。あ。の。越。路。菟。紫。あ。の。ま。路。	親。と。ま。や。嫌。よ。中。ま。も。二。句。 あ。や。と。し。は。き。き。り。連。懐。そ。し。	お。ん。ぬ。と。く。く。二。句。き。き。り。し。 あ。の。ぬ。く。く。二。句。き。き。り。し。

千句句	法留	同	看不續	三句續	戀句	夏冬	春秋
鬼。女。鱸。風。龜。龍。虎。な。こ。い 千。句。句。一。句。乃。お。子。を。あ。ま。	上。の。句。に。は。い。と。ま。あ。ぬ。お。そ。う。 下。の。句。に。は。い。二。句。も。あ。る。一。	人。倫。や。天。象。ゆ。り。と。め。そ。び。き。ま。の 一。句。は。い。と。ま。あ。三。句。は。い。と。ま。	衣。敷。生。敷。柱。物。名。不。國。の。名。い 一。句。は。い。と。ま。あ。三。句。は。い。と。ま。	神。秋。や。心。敷。水。意。居。不。無。分。 一。句。は。い。と。ま。あ。三。句。は。い。と。ま。	一。句。は。い。と。ま。あ。三。句。は。い。と。ま。 五。句。は。い。と。ま。あ。三。句。は。い。と。ま。	夏。冬。ハ。報。子。ま。て。平。句。い。い 一。句。は。い。と。ま。あ。三。句。は。い。と。ま。	春。秋。ハ。二。句。は。い。と。ま。あ。三。句。は。い。と。ま。 五。句。は。い。と。ま。あ。三。句。は。い。と。ま。

後身といふ物を活字に写すて予ももろり
 せよといふをいふははらとて思ふも万葉の歌の
 東浦のあはれははらのこととてまねりぬ美事
 中古おのりもねも 後拍原院丈草元
 西三條門府牡丹花宵相 勅をりうりや
 新式分案を定むるはをてい筆をねの
 葉いあがのしはあつていし 初葉より
 是はあつていしはあつていし 練筆批判跋
 濱の海さとのありうとていふははらとて思ふも万葉の歌の
 東浦のあはれははらのこととてまねりぬ美事
 一滴を破乃水よそくくものこ

○ 本式俳諧の辨略 用於連歌法

表十句 表のうらみふらぬはらと

初折の裏十四句二三の折。常の折。必の裏六句
 景物なりて三句もいふは又おねねとて
 月と花と雪と郭公と麻呂とつるもお
 ねをききき
 花 又後一に一句は、お合八本と
 桜 四本但表に花裏に花と桜をまへ
 月 又後一に一句は、お合八本と
 名跡のうらみ六句の内は月花あり白ひの花と

初秋し若花よの百番ちをれしを花の
他の季の花は下へ自然なる花表の
白ひの花は他季より下へ

同季七句去 但るは他の季と合さる下へ
名不しく五句去 陸物 算物 草木 各二百去

月花松舟号洞竹煙等十句去し
岩猿関檜楨草心教し

茶句賊物下へ連河よの舟の賊物船松山の流
定まる文字あり流落より下へ取ると真ある字を去し

右明應元年に改むる式目之此の應安の新式のあり

○千句の法并万句矢數

千句ハ百韻十卷し茶句十句は四春 三句 夏二句

秋 三句 冬二句 へ亦十句ととに花は一月とるに

とる法もあり春秋の茶句は歳下とあせられたるを
とへ一類ひの切字も今へはあつた切字をて寫し

題ハ初春。霞。梅。雪。等より一俗なる類も今へは

茶句十句の内雪月花名鳥木の宗物等あり下へ

一毎一句の物あり鶴。鳳。亀。龍。鬼。女。等のナメケをきことにて

十句毎あり十百歌を一日に満座するは此時十卷

の表八句を毎日したるは茶句 是略義とてととと
古はありととと

○續千句と云あり是は卷頭の雑句一句と云らば
海(の)九百韻の雑句なり一むそ九百韻も表の
下を八句よとせんと神祇尺敷教意等とせぬ
法令もあはれ雑句あり終を才三の端りもなり
○方句の百韻百巻と雑句の割その中大體
の句に准て古來の独吟し矢敷神祇と云世
人救をあらはして與りしとせ

○天數 句の法(の)と云はれ 文臺 八脚十脚を極其宗匠の句
句見一人は(の)副 執筆 筆を撰て 鳴鐘 十句目く
此亦宗匠の句なりとのあり大體を記との

○四季雜の正花并四季雜の月

貞徳云摠別正花はなる月と云物をと皆去り
月と云義なれとと連袂神祇をさるるの花
下は雜句なり 其時ありては理をまひ
雜をと雜はさるるし能くもあある

此亦宗匠の句なりとのあり大體を記との
皆去りては植物は二句きと云らるる点なり其
宗匠と辨ふべし又集物云捨りては其の句なり

○春は正花 植物は三句去の分

花の都 白律と傳 花の江戸 日上 花の如き 白律

花の雲 聳物 花の浪 も色 花の露 も色 花の霞 も色

花乃雪 うら若 花の露 花山と雪のうら若と色 花の心 そのあつらひのうら若に花

花瓶 花入 花生 花籠 花籠 花四尺教

花車 花軍 花切 花切 花寺 花島

花園 宇治のむすひ 花の宿 春 花の隣 居りし花を宿と云は

花の舟 舟 花の友 舟を舟と云は舟と云は舟 花の友 舟を舟と云は舟と云は舟

○春の正花 植物子二句去の合

花の家 衣敷 花の袖 日 花の紋 日 花散 花散 の花躍

花心 花身 花身 花の心 花の心 花の心 花の心

○雑の正花 花の心 花の心

花紅葉 三句去 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心

○雑の正花 花の心 花の心

花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心

花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心

花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心

花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心

○夏の正花

花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心

○秋の正花

花火 花火 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心 花の心

○冬の正花

梅三つま 餅花くものま

○非正花

花梅あつて花は草本とむまひてい 花野野の花
花下子花田色の浪の花 雪の花 花の帽子

○秋花月

名月今宵の月 新月 名月
三五夜 良夜 後花月 今宵月 栗名月
十五夜 十三夜 盃の光 玉兔 玉乃兔
玉蟾 月の蛭 嫦娥 嫦娥 星月夜

上弦 下弦 有明 月半つけたりやひさ

桂影 三ヶ月 小望月音 望月音 不知夜十六日

あし侍月十七日 居待月十六日 少待月十九日 亥中月廿日 正夜月廿三日

○非夜分月

三ヶ月出 春入ハル 夕月 夕月夜

善月善月 朝の月

○春花月

月花 桂の花 朧月夜 朧影朧影

○夏花月

月の霜 月の雪夏のかま葉をあらはす月の朝のあまき

○冬月

さき月 さきげき月 月の氷 いづかき 組 くみ 白 しろ 氷 こほり にも も

○雜月

月雪花

一白にむすも 雜毛 雑毛 心花月 尺教し 胸乃月 日正

或云臘心の月、誠の月を違て秋になりて夜分のいづれと云
みよともをのふとく其宗匠より人きし古法にかのふとく

○月次の月

越月 こゑ 月 つき に に なる なる 月 つき

秋月

初月

正月

春月

冬月

夏月

秋月

冬月

春月

夏月

秋月

冬月

春月

夏月

けしきひらけともあり

○義なり如水洋にあり節集成てきのを

流るるや去て春林洗五よせの春よゆ

滅に源泉混々として晝迄を後復憐の

英雄ありて宗匠とありて依り誰楽に

後錦に裁るるや中澄る人折とてあり

後々の宗匠を以て加ふる書よありて

書賈の答るるむろとせんと其勵とる宗匠

張儲を或る其点印譜を茲にありて

かゝぬ唯惟晴軒に俯して背を炙り我独

よれしものし

享保十六爰編集

綾錦後宗匠并變名宗匠

沾湖門

鈴木羊素

雪明展

前松路或云鈴糸元無倫門人後心保立志三物組合續父表德改羊素古羊素高井立志門人享保十七子冬披露居石町二丁目

變名

深川老鼠

前湖十 享保十八世變名

木者菴

又云鼠肝

居淺草寺竹門

老鼠息變名

深川湖十

一黙香

又云巽窓

居堺町北新道

變名

堀尾調和

前和推

續師表德改調和享保十八世春

敲柝堂

居本芝

調和息

堀尾和推

前和交

續父表德改和推享保十八世春披露

敬而菴

居濱松町三丁目

音峨門

西門存義

前泰里

享保十九寅春披露

李井菴

居灵岸嶋長崎町

立志四代目

淺見立志

前如搭

元副介我

和樂園

和階堂点印至和散才今立志附屬之享保十九寅冬披露

居飯田町坂

貞佐門

富岡有佐

前露圓

先師点印附屬之享保廿卯春披露

所路菴

居小石川指谷町

沾湖門

今村幸徳

前石泉

或云魚尺元佳風門後為沾湖門享保廿卯春披露

裏中舎

居和泉町

局菴門

笠家舊室

前岳雨 始老菴儿下

享保廿卯夏披露

居同師

活土

一漁息

鶴海晋阿

前傘車或豆花

享保廿卯冬披露

堤

堂

居同父
淺草御藏前代地

斐名

笠家局菴

前逸志或一志

享保廿卯冬改之

素竹軒又羊局菴

居淺草寺竹門

常仙息

志村長鶴

享保廿一辰初夏披露

居同父
神田明神下

○印金乃説

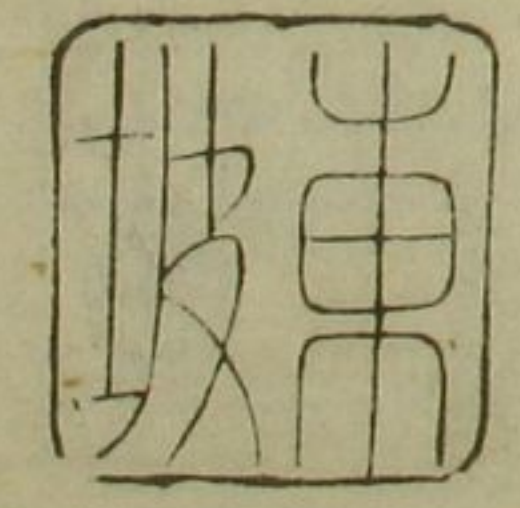
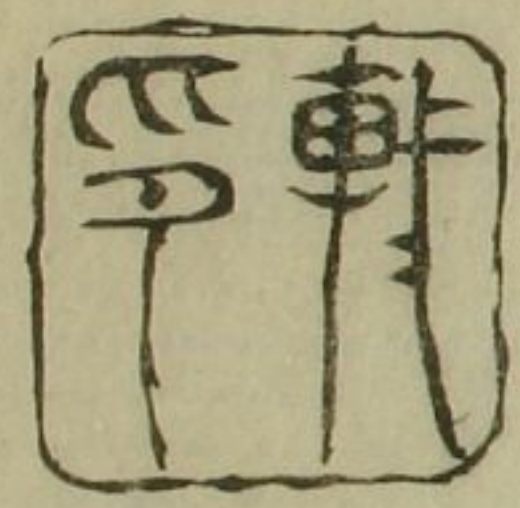
点印の因より記之

印重ハ或記曰ニ史五經をニ道とて則記傳
 明証明法と釈一其理をあきくむの義なり
 吉備公の録音韻。算術。明法。篆籀。五經。三史の
 六道よおて人間心法の真実をあきくむの
 ハ印重し故の明法と云神代より公孫拓多の
 り其本公の真と見一疑公を疑一織を
 公と止るを明法と云太古人の公直行し真言
 其事とみふと真古。呂氏真古登と云人の
 代の至人公がく真言とみふと其の要あり十六代

若梅宮 神功后皇 三韓を去る人殺し韓王未代日本の
 降人なる人事を控えて自筆の筆を多に書きしは
 の権輿くしとて文字筆理万物におのこふと書る也
 いわゆるこのこと才一公と書るの書道くし上の
 語を何れとて訂正に至るまで其姓名を
 去り筆を心真をあらわし故に未代より
 くる筆物等も其印あると正しく印なきは不正す
 ○或云姓名の下にあると印を私印と云あるは
 姓名字御の四つを合せて四印と云又去る
 所の端にあるを国防印と云是れ筆者の

是より奥の名印ある所すて其書くといふ所の
 境を知るすうゆへに或る肩の印又直印と云し
 其印の形は堅長くして直なり故し
 法、書出ス文字より 一寸五分 右、ヒナリ 上、ヒナリ 字府見
 四印と云ふ

姓 蕪氏 名 軒印 字 子瞻 郷 東坡



郷 楠氏 官 河内判官 姓 攝朝臣 名 正成 此四ツ

○点印譜

改、前集、亥、後改、所、
点式ナリ、有余、前集、

仁智鳳凰、九章、芝蘭玉樹、凌雲意、
至河漢、朱褒、各為服書、朱、長、
羊素

改、不盡、長安花、雪月、各以朱書之、
朱雁、墨雁、三、九、
老鼠

改、半面美人、准句、芭蕉、一、日長安花、
洞庭月、越雪、長、三、九、其角点印也、
湖十

改、金精、手、日、海棠、廿、洞庭湖上、十八、娥眉山、十五、
明列、十二、銀輪影斜、十、廣寒府、七、朱、五、長、三、
貞山

設儿案、准句、雲井、花、十五、殘、雪、十、
芳野山、七、朱、五、長、三、九、
和推



秋雲羅、准句、錦上加花、十五、蜀江錦、十二、
吳綾、十、金綺、七、珠、五、長、三、九、
和階堂点印也、
立志

玉姿、十八、回文錦字詩、十五、花影上欄干、十、
新月色、七、回雪、五、長、三、
貞佐点印也、
有位

神龍、二十、龍依積水蟠、十五、澤養千年、十、
幽能明、七、朱、五、長、三、珠、二、
幸德

雪中翫、二十、軒端、十五、踈影碎夜月、十、
千歲栽、七、朱、五、長、三、
舊室

秀逸、准句、花王、十八、香錦、十五、
玉冠鈿扇、十、秋萬鈴、七、朱、五、長、三、
晋阿

甲

乙

江湖十八、十二字十九、八字十、
四字七、朱五、長三、
長鶴

改 秋夕く残 准句 浦筍屋十六、鴨立沢十、獨步菴
換立山七、朱五、長三、九二、
起波

改 閏余毫十、餘毫十五、即揮毫十、桂坊
餘朱七、朱五、長二、
沾山

各以朱書之印
如沾德点式

○ 誦風変化の辨

九 郡藩の凡々元和寛永の頃
洛長歌九
より歌口立圃松江維舟に
如く寛文の頃
大やかりは是を古流と云
延宝の頃
西の宗因後林の誦風を起し
天和貞亨の頃
伊東信徳富尾似舩斎藤如泉
松月菴随流御溝
吟水等より誦の正しかり
より誦江芭蕉菴批青
中興せしめぬ是を古風と云
古風の誦
誦と引つゝの誦の時なきと
連歌よび
を
ゆるいより
茶臼も
付合も
異なる
か

何一色蕉翁の凡の連歌の案なる古流の
誦との一厥中をとりて優艶に考ふる上異
神凡なるを都鄙統て考に傾きやるなり
又元祿のころ晋子其角酒落^{ニヤレ}神落とて有合の
一物を記しる本河曲一蛇大野を和名を英
等の宗匠合辨して尚時の酒落と云神落の謎字の
解は外を考ると一白の訣別なり尚流正凡神と云
是に考ふるにその枕と云書を編む北蕉淳生
原俳論との一紙小冊を其考言として正凡の
化鳥といふと誦傍一考より兼江は神落二流

よりの流ぬ芳賀一晶の流に都として自の流を
考ふる其角とて一後水田は佳はるなり流を
まじむるの蕉門流の考ふる其角とて今千首
その流より今流流城がり其息不扁青角乃之志
益一流を考て此の神凡の考ふる其角とて
○古の古の長を浪とて百類に長点三百五流
丸流重なり平点よお考ふる其角の点おあり
其角なる句七十余もある規換の巻とせり元祿
の中頃までも其角考ふる宗匠考ふる
高野出心の擢の形^{カヒ}の其角し片朱雙朱の五五流

岸本重軌軒謙和の増朱。兩朱より二点を限印なり
 室井其角の乙点よりこの字と点と一甲の印なり
 服部貞實の園長。探荷。探昌の文字と点と一甲
 今の千菊の交朱。五葉。兩葉と点と限印なり
 芳賀一鼎の凡字の点と点と。金羽。雄翁。雄翁の印
 高井立志の玉驛。金綺。金章の印あり八点限あり
 天野大白堂挑海の挑花。更衣より八羽。室陽の印あり
 大野秀如の紅葉。藤紫。梅銀。菊金あり。此の印
 佐保介我の川朱。の字の点。曲水。御被。七夕。時雨印あり
 河曲一峰の彩長。銀長。金長。六点限。印なり

各五七点を限したる源卯辰此頃一統に点印を
 彫へ十五廿点を褒美に其角の字を可なりとい
 せざりしと世の今も是も所々の点ありて
 今湖十の附屬とらるるの印と設け尋常なる点
 をのびの標し、かの表も凡とありて半面美人
 の字と五七点と極く其の印と此是の地の十五平
 乃点以驟然とらるるの如し其凡の如く
 天大井向の如く
 天井の如く大田の如く引ありて
 此類の如く

○古來付合高点乃句

○松永貞徳判

鶏冠井令徳独吟百韻

足

前句 ぬりらりく実の入大長や多うん
のつこいあの一いぬ

く

前句 あふぬも思いと松や海うん
洗めく神を又せぬ 浪良

○同判

安原貞室独吟百韻

飄

單ハ志ハ菜植の志ありぬ
菘 蓼 蓼 蓼

菘句

長

あふぬも思いと松や海うん
あふぬも思いと松や海うん
あふぬも思いと松や海うん

前句

月 影のありと光りかやく
影のありと光りかやく
影のありと光りかやく

○同判

松江重頼独吟百韻

神

前句 うみ時やうしと思ふ
農のたのつ人のかこさふ

か

前句 けつの中海とさふさふ
くらの谷あひ

○野口立圃判

服部定清独吟百韻

好

前句 入の束り柳灯をかませて
あふぬも思いと松や海うん

長

あふぬも思いと松や海うん
あふぬも思いと松や海うん

○高井立志判

九 唸 百 韻

前句 月のあつをみる年とりの大夏

長 橋のふれ杖こそ老の役なき 古 調和

張 前句 流石の花車に足車の大名 卜入

石田未得判 四嗟百韻

張 前句 よもゆ白経のまろしりある 幸娘

張 前句 芦のゆるもよもぬまうり 政勝

足踏ハいあし人のあそびは白めて作共も皆
名ある人し海ノ時代なる如當時の初学
の人もあやふしつとぬるものをも傳れ

○ 當時付合の句

頃年 洲崎村合のまこといふあしはと
老宗 匠達乃海いひあるも誠なるを初文刻堂の
とてとて一とをぬるとせぬ外の新梓をわぬ
あしとて一とて續花摘。古く集。四季の巻。菊畑
東千句。紙のい。江戸八百韻。合あつ。友あ。禁集
一集。鳥。鳥。鳥。とてやうなり。洲。とて其書。とて梓に
とて人のい。とてとてとてとてとてとてとてとて
左に記す必死句のまに海なきにわねとと人これ
記すとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

前句
雪のほろろこあつて賣

音峨

前
雑巾に其角も走る長廊下

超波

前
公卿く飯を居るより増
ぬう出まよひ古いつらり

半溪

前
藤せら子に翌春をたきつて

魚貫

前
夫兄よりよふ答る狂言に

老鼠

全句

お店の子に泣けるあつて

湖十

前句
悪れぬさるさるなるり

落鶏

前
傾城乃よぶさるさるなる

素丸

前
宿りつゝ礼子端杖屋く

超波

前
まじりやいおもを居る不使

石文

前句 吉に秋のをささり
三味線にたもとすけり 櫻の月
采仲

前 花あらしんともなほ
那 藤はくは北に及ぶ作まはせ
如簧

前 宿の月刺して居泣み
昼のほろのありらーさよ
大梅

前 づの頂より 籠のこら賣
その草ははまあといふぬさうて
共蒼

前 蕙うけおまぬ後て木を削
ふーさーさー知れ冬の日あたり
博山

前 情あし親善種をささり
人子かゝるく生けて居るし
魚貫

前 あさくそくにをゆるをを牛
唯一ツ月にさるんお月る星
沾山

前 籬のそとに好まこつ
居て登り内後乃膳一日ある星
可客

前 苦いさむるとほろあし
みくろ子の遠く先をさるのけえ
湖十

前 高炮籠かゝるめそ酒白
高炮籠かゝるめそ酒白
超波

○四季乃茶句并和詩

○春の部

糸のうら玉子を投一や方の空
出来合の交を井ありはるの表
一番の化物なるや梅の花
むめうになあもて居る遠く如
正面も如くは雪中の梅は兼
梅咲や帯に足る顔新しき
布一羊に片枝さびし梅の花
昨去よりさびき日もありむめ
明際の雲うらうきさびたの如
梅さあく日よく雪いよとれり

千翁
沾涼
琴月
賀朝
交阿
未石
東隣
沾涼
立武
操川

中^{四支}くは世をこの氣迄のる業外
青柳よお月をかるそ星月夜
降る雨のつらびて居る梅の如
人別てはまのそとぬ胡蝶外
根おろしよ吹流るそあそふ
と梅のさきよしては梅の如そあそ
横をい毎居てたんでは下外
沾涼梅 梅の浪なるは下外
表さあや狸の伽治を如る
表雨や馬は栗の表しさい
そとあやいあくの人今如人
大梅の竹る表りや可し梅三

琴峰
珪琳
布仙
有佐
梅五
倫仙
羊素
沾涼
一漁
魚路
千楓
涼之

山夕

貞山

漁友

素流

涼巴

玉賀

丈岳

沾涼

千梅

千那

蕉門老

千那

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

蕉門老

那のよりをりまきりて
あつくりをりまきりて

赤代

うぐいのゆきをめりて
うぐいのゆきをめりて

清溪

袖の生きりしよめ
袖舟をまけり得る魚を
生きりしよめ

千楓

白桑の中一乃いひかめさし信まきりて
ついでに乃をのほよさしたる

神の本やまの橋乃堆

魚路

まの紫のうもと瀝く

清溪

お脚

呂庸法尼

咲く花の名もあつた
咲く花の名もあつた

山原氏女カヨ

玉椽八代とまはせり
玉椽八代とまはせり

彦乃 瀝

神祖の安去り
神祖の安去り

○夏北部

時をのりまきりて
時をのりまきりて

沾山

小僧きり
小僧きり

存義

在りの耳を
在りの耳を

燕子

麻屋よむ
麻屋よむ

沾涼

岩倉の色
岩倉の色

倫仙

谷あり
谷あり

雪朝

鳴る
鳴る

雙五

あつて
あつて

蛙音

夕立
夕立

友子

秀の
秀の

左隣

の
の

胡十

後投て 斬に 雁も 夏の
其もや 下り 水も 魚乃
ふりや 蝶の 音を する
花も とも 百合も 富美の 面あり
縁も とも なる 志も 思ふ 心
塩鯛の 水も とも や 五月 雨
その 音を 痛き せよ 知る 心
夕立 や 下り とも なる 心
一か 吹く 夕立の 白ひ 心
照る 中よ 志も なる 心
苔の 根を とも 縁も なる 心
葉も とも なる 心

賀朝
長鶴
尾谷
乾什
音都
布仙
音里
史登
溶く
音武
百洲
沾涼

風香

松の 琴も なる 心
ひくく とも なる 心
竿の 葉も なる 心
雪の 物も なる 心
梅香も なる 心
さや 梅も なる 心
とく とも なる 心
席を とも なる 心
谷川も なる 心
つまじ 時も なる 心
ひくく とも なる 心
虫や 大や なる 心

沾橋
魚路
琴月
涼牛
吳竹
梅五
沾涼
末石
布仙
音城
漁友
局菴

秩父川

大宮

享保十(一)子故卿 天満宮以備

今(一)くも 彦彦の香あつ神の林

法林寺父母の廟に備

高き(一)事 須弥の(一)の(一)の雲

一族(一)背

芥の(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

新女(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

是(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

は(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

能別三吟 沾涼(一)東武(一)の(一)の(一)の

冷(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

系(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

麦の(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

修(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

新樹陰 今(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

な(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

沾涼

舞女

太田 狸

菊 紀之

服 涼 佑

沾涼

○秋の部

蛸(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

此(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

牽(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

床(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

草(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

名(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

俗(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

骨(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

雙(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

い(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

麻(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

琴月

萩波

燕 子

沾涼

雙五

布仙

賀朝

沾涼

和推

來川

魚路

わづのけりあゆむる紅茶うぬ
枝少一て海を新色つ紅茶うぬ
とつきりと船にんきり楳乃葉
新月や海り鳥のよる人ぬき
正月の今や月たもてる光り外
名月やふゆの思ふ心飲おほ
須戸の馬て唯る人來りぬ月

幸徳

梅五

江陽
千梅

音里

梅子

梅條

輕羅亭
小扇

氷乃
谷美泉

つげまゝとるれ船の心室あはるる木の家はて
世中の人の心秋まはるる色香やをのこる
しゝ鳥のそあはるる夕虹の影うははく燈の長物

ふ家秋

おとあやうある河の心は

湖水船望

おゆり

友もぬき老の頼ひや種ぬく金
出んふあかくて海より江戸の月
十の物ルつある心秋乃く重
らる苦の柳もちく秋のく幾
野くとぬや花足の時ノ電の絲
ぬきの馬や馬につぬぬ入れ花
菊さうとぬぬさうりし

昔紫軒

千洗

沾涼

涼辛

小次氏
沾涼

秋父小川
笛之

沾橘

何とかく京の匂ひの下を名
そらふ家のたよりぬを種しつ雲はほあはる
よまゆこころを名ぬ龍田之種を種しつ川を名

沾涼

備工舎布仙子とついで正燈禪林子ゆぬぬは寺の
とるる高維の種なるし江戸秋まはるる

雪朝

その種の出も照りぬとみらるる
布仙

いあしおのしー 谷の下州子動りうし海を流るるあり
 海おき國の枝葉まきまきとるまひのたきいれあり
 木のまひいこまひのこまひして老あるひりか
 雲のゆるまのころこし下つたさ
 ー海まて、 紀ののち有し
 沾凉

ぬちーとや昔も榮とそそ神の志
真栖の浪の女執男瓶の海平よありその中なるうし内
 ひこまのゆるまのこまひして老あるひりか
 神のゆりやとままままのまの神くら
 秀取のやあり

吾もあも神代の松の白むり
 老嵐
 舊室

○冬此部

松のむた乃とぬきーきーし金取
 嶽／＼のおまのりつ箱のゆりーら

むー／＼／＼や／＼や／＼は／＼久
 風流の本へのつや／＼神分月
 折／＼／＼を／＼／＼て枯野くら
 楳の葉よとまき／＼雪やむ／＼／＼秋
 赤水の流／＼／＼る 湖／＼／＼と
 ゆる／＼／＼を／＼／＼る 菽の裏
 川／＼／＼更て揚鼓のつゆさ
 東のま／＼を／＼／＼合て／＼／＼氷
 澄／＼／＼雪／＼も／＼／＼る 雪の空
 雪／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼や 葱島
 花のま／＼／＼の秋も／＼／＼の雪
 正陰や子に蓋をする室牡丹
 調柯
 音里
 菡波
 沾凉
 魚路
 涼之
 東巴
 梅五
 雪朝
 竹島
 布仙
 琴月

大漁まきくられてふんちうり
 川まきと少けそむく千島外
 三葉四葉の楢の橋のさむさうな
 折のうらたのらさむる屋敷外
 ふびこの庇をうくく木の葉る
 気はけうも第の信を葉る如
 ころころと木の葉の菴切り
 一人も鰯いよるとやうきぬ
 大岬日維の枕乃鶴の夢
 悠然と月夜の明て大海日
 月も山もそは流る早瀬のうら
 常仙
 東隣
 沾涼
 晋阿
 賀朝
 露月
 錦志
 沾龍
 涼宇
 潭北
 沾涼
 夜長
 川勝

豊後國由原穴量

八幡宮奉納
 越口左隣拜
 孫左舎
 左隣
 木者菴
 老鼠
 飛來亭
 魚路
 野々奇
 音峨
 秦址
 丈岳
 釣月堂
 漁
 紫井
 雪朝
 崔下巷
 沾涼

神祠
 檜花
 まろい筈の園よりとやうら
 神の戸いよまの橋ふりな
 川いよまの魚よりなを長宗なり
 青あはらけの山
 笠を帆舟もそる夕陽
 神をのそれを常の魚つり
 滝の雪いよまをそる花
 古宮
 背月
 ぬりやれ月よ白ひや神乃寂
 沾涼

○前集異説の解

連歌師宗砌 連歌宗匠の権輿ハ侍公と隨流ハ
書にあり又連歌師の尊ぬれ宗匠の何れあり
宗砌とて則連歌の宗匠新在家代々の意増
たるとする祖ハ宗砌ハ心敬専心とけくまを
解ハ隨流の説の如く傳々前集に其疑ひを
とす一處より其後本朝字府と云れ宗砌ハ
百六代後柏原院大永の頃の人也飯尾宗祇と傳ハ
時代ハ侍公二條良基の頃の人也良基云の世終ハ侍公の才三あり
良基云ハ百一代後小松院應永の頃めて百有餘
年とわたりて今疑ひを解

良基公江別石の如きの御會を應安の頃と前集
め年より應永の去遠くして今則改之

二代目の心敬僧都ハ百二代一稱光院の御會とあれと
應永正長の時代とて前と符合に

宗祇 宗砌 牡丹花 守武 等ハ同一時代あり
百六代 後柏原院大永の頃の人也

三光院實澄公 又實技ト云 前集 實條ト誤 宗長 宗牧 等ハ
百七代 後奈良院天文永祿の頃の人也

九條玖山公 幽齋 惺窩 紹巴 宗鑑 等ハ
百八代 後陽成院天正慶長の頃の人也

近衛龍山公 貞徳 立圃 以下ハ七律仙ハ
百九代 後水尾院慶長寛永の頃の人也

岸本調和 前集に京安靜く江戸徳元門人の
兩説を記し似空軒安靜門人の史也

岩本子英 前集に松樂軒立志門人と記す非し
勢陽松坂春陽軒加友門人といふの字英現在字奉
乾竹の先師なり

樋口山夕 前集に高島玄札門人と記す非し
石田未得門人といひ或一代目の立志門人と云説も
ありさうありはれ志とともいへりありの
宗通ありそを要するもありしなり

現在 千足尾谷 今の沼門のなりし
志水盤谷の集乗持格録は子尾谷と行徳乃
南梢の流身門人といへ中にも尾谷高弟と
いへり尾谷の年表の郷友とて予毎く懐く
少くを記す所のありしをきそふ集あり

上巻 終



527

